

琉球大学学術リポジトリ

蔬菜価格の変動と輸出・輸入(1)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重, Tomoyose, Choju メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19591

台風についてはいまさら述べるまでもない。

琉球氣象台発行の気候表によると、那覇の年平均風速は四米（秒速）、最多風向は北東であり、石垣は、年平均風速四、七米、最多風向は北東であり、宮古では、年平均風速七、一米、最多風向は北東である。また、那覇では秒速一〇米以上の暴風日数は一〇四日、一五米以上の暴風日数は二九日で、合計一三三日即ち、一年の約1/3以上は秒速一〇米以下の風が吹いていることになる。

次に潮解時を六巻一号より、五五年度の風速の速度別頻度をみると、石垣、宮古では秒速五米の風が最も多く吹いており、那覇、南大東では秒速三米の風が最も多い。また速度別頻度表より、秒速三米以上の風の吹走時間ならびに秒速五米以上の風の吹走時間を計算すると、第四表の通りである。

第四表

地名	秒速三米以上の風の吹走時間		秒速五米以上の風の吹走時間	
	時間	上百分率	時間	上百分率
石垣	六九〇時間	七八・八%	四一九〇時間	四七・八%
宮古	七四六四	八五・二	五五七八	六三・七
那覇	七〇七六	八〇・八	四八二〇	五五・〇
南大東	六〇四三	六九・〇	三三二三	三七・八

第四表について考えると、一年（八七六〇時間）のうち、南大東では六九%、宮古では八五%以上の風が植物の同化作用に有害な秒速三米以上の風を吹走していることになり、また、各地とも一年の約半分以上の時間は、最も有害な秒速五米以上の風を吹走しているわけである。故に、突発的被害を与へる台風よりも、常風の被害が目には見えなけれどもいかに大きいかということをご推察することができる。したがって、琉球では防風林を造成することによつて台風の被害を減少させ、生産の安全を確保し、常風による被害を防ぎ単位当りの生産量を増加させることができる。防風林造成の結果もたらされる生産量の増加は、防風林造成により減少する耕地面積の生産量を補うのに充分余りあるものと風われる（つゞく）。（諸見里秀幸）

蔬菜價格の変動と輸出・輸入

(一)

蔬菜は貯蔵力が乏しく、輸送も困難なために外国市場との関連性が少なく、国内生産者間の競争が激しいために価格は常に動揺し出荷が僅か一月程度遅れることによつて価格は半値に暴落することも珍しいことではない。外国からの輸入はその国の盛産期に限つて行われるので、輸入によつて国内生産物の価格が低下する事はあまりなく、島内産が生産物の輸入が中止されるのが蔬菜の現状である。

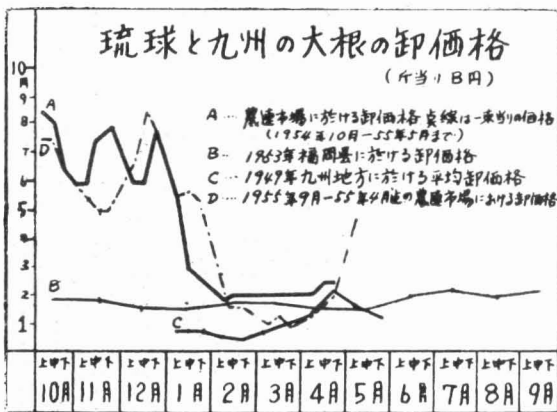
琉球では終戦當時から一九五一年民間貿易が開始される迄は種子不足、その他色々の關係で生産量が少く、高価格を保持したが、五一年以降は生産量の増加に伴つて価格も低下し、供給の増加につれて量よりも品質が問題にされる様になつた。

生産者も単に生産するだけでなく、常に市場への出廻り時期種、出荷量、消費者の好みに関心を抱いて調査し、来年の市場を予察して作付けする種類、時期を決定し栽培に移らなければ有利な経営を行う事は不可能である。

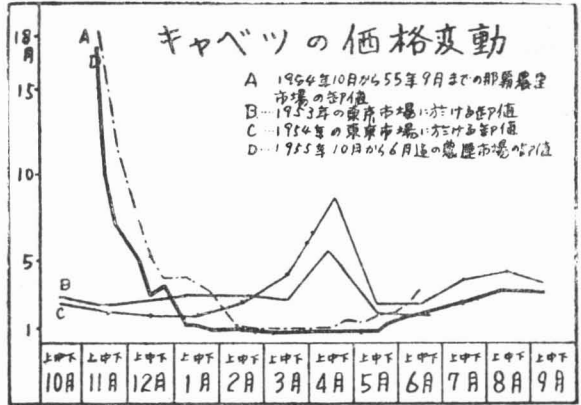
其処で次に那覇農産市場に於ける主な蔬菜の価格変動と日本市場のそれ等と比較しながら輸出、輸入の状態を調べることにする。

一、大根 戦前戦後を通じて最も栽培面積の広いもので昭和十一年には芝罘作付面積の二六・六八パーセントを占めていた一九五三年には一六・一五パーセントに減少したが、矢張り作付面積は一位である。次回の農産市場に於ける大根の価格変動をみると、一月上旬迄は斤当り五円以上の価格を維持し、十一月の末迄は品質により五円乃至十円の高値をよんで有利に販売される。価格には毎年幾分かの変動があるとしても十一月迄の価格は有利である事には変らないであらう。

此の時期の出荷には青濃早生、時無大根のように耐暑性が強く収穫の早い早生の品種を作付けて一日でも早く出荷した方が



有利である。沖縄在来の鏡水大根、ワインチヤ大根のような食用の大根は消費者から最も好まれ、単価も高いが晩生であるから早期出荷には不利である。しかし十二月頃からは盛んに出荷され青濃早生より高値で売れゆきもよい。一四月の出廻り最盛期には単価は暴落するが、五月になると上昇する。その時期からは抑制栽培大根、主に時無大根が出荷されている。又青濃早生高温期用品種の導入に努めなければならぬ。九州地方の平均単価からみて輸出の可能性は全くない。七月から十二月にかけて日本から多量輸入されているが、一九五五年度の輸入状態からみると、七月から十月にかけては斤当り輸入単価は八円内外で十一月、十二月は三、四円となつていく。



二、かんらん 戦前戦後を通じて大根に次ぐ栽培面積をもち昭和十一年には卒業作付面積の九・八八パーセント、一九五三年には十一・八一パーセントである。一九五三年の栽培面積は大根に劣るが生産量は大根を卒業生産量の二六・一一パーセントに対してかんらんは一八・一六パーセントで大根をしのいで卒業第一位を占めている。

重要な卒業後に価格の変動最も激しく八、九月の輸入キャベツは二十五円以上にはね上り、十一月頃島内産が開始する頃迄千円以上を維持し、三、四月頃の最盛期には七、八十銭程度に下落する。

最近耐暑性の強い華探かんらんが導入された事によつて七月初旬播種して、十月からの収穫が可能となつた今日、その普及と共に十、十一月の異常な高値も幾分かは低下すると思われが十一月迄は毎年高値を維持し有利に売買出来る事には間違いない。

一月以降は輪田の道を開かない限り一円以上の価格を保持す

る事は出来ない。しからは輸出は可能であろうか。

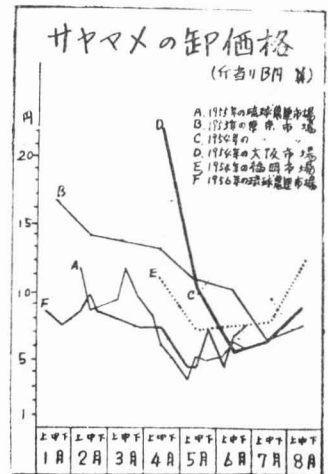
戦前は重要な輸産を業として毎年多量に東京、阪神市場に出荷された。しかるに戦後は一九五三年から初めて阪神市場に出荷されたが成績はよくない。一九五三年の三月から五月にかけての総出荷額は六十六万担程度で、一九五四年度は三十二万担今年は二十六万担程度である。毎年減少の一途を辿つており今後はどうであろうか。

普通かんらんは或る一定の大きさ以上に成長した時一定の低温以下に一二月以上置かれると抽苔するが、日本の気候条件下に於いては四月取りのかんらんは抽苔期と行致する関係上栽培不可能な状態にあつた。夏播が一二月、秋播は五月以降に収穫されるように栽培されてきたため、四月は特定な暖地への出荷となつて、油種から高値で有利に出荷されていた。

戦後の目覚ましい品種の改良と技術の向上によつて、夏播が一四月に秋播が四月から収穫可能となり完全に四月の穴を塞いでしまつた。図に示す通り、東京と油種の単収の伸びが非常に接近して来た。今後も絶え間ない品種の改良と技術の向上は益々両者の伸びを縮める事が予想されるので輸出の可能性もますますある。逆に七月一十月にかけて日本から相当量の甘藍が輸入されている。一九五四年には四万斤余、金額にして四三万担程度で、平均単価一〇・七二円で輸入され、小売値が十五乃至三十円程度で販売された。

化繊の性質と用途

最近スフ製品の需要は急に増し、これと共に化繊の名も多くの人々に親しまれてきました。化繊とは、化学繊維の略で天然繊維(羊毛・絹・木綿・麻など)に対して化学的方法で人工的に製造された繊維のことをいいます。化学繊維にはいろいろな種類があります。デパートお街の洋服店に行けばいろいろな



三、菜豆 サヤ豆用としてどれだけ栽培されているかは明らかでないが、食生活の向上、清浄蔬菜の出荷に刺激されて、戦後栽培面積が増加した事は間違いない。さや豆は農産市場に十一月の中頃から出荷されているが実際は十月頃から収穫され、その中高価格を保持している。

日本からの輸入は全くないが、戦前は日本へ輸出していた。今後も図に示されている通りの価格の差からして、東京、大阪市場への輸出は可能であろう。続く。

(本稿は本学部、今年度卒業の平安山良勝君の調査研究に依る。)

(友 寄 長 重)